

Newsletter

SOSHOTSUJIN



- 学術会議参加報告
- 活動報告
- 研究活動報告



**二松学舎大学東アジア学術総合研究所
日本漢学研究センター**

—— 日本漢文資料による日本像構築の国際的研究 ——

Nishogakusha University Institute for East Asian Studies
Research Center for Kanbun Studies

—An International Research Project Based on *Kanbun* Sources
to Reconstruct a View of Japanese Culture—

Vol. 31

雙松通訊 Vol.31

学術会議参加報告 Report on Academic Conference

- 01 日本中国学会第76回大会に参加して
日本中国学会第76届大会参会记

活動報告 Report on Activities

- 05 西三島家（三島中洲生家）の家伝資料の寄贈
西三岛家（三岛中洲生家）捐赠家传资料
- 07 高校生による探究活動の事後報告
记一次高中生研究性学习的调研活动

研究活動報告 Report on Research Activities

- 09 『続資治通鑑綱目講説』等資料調査・杉山令吉『三郊日記』等
資料調査報告
《续资治通鑑綱目讲说》等资料调查、杉山令吉《三郊日记》等
资料调查报告
- 11 寄贈資料一覧
List of Donated Materials
- 14 公開講座
Open Lectures and Extension Courses
- 16 諸会議等報告
Report on Business Meeting

日本中国学会第76回大会に参加して 日本中国学会第76届大会参会记

日本文化大學教授・二松学舎大学日本漢学研究センター研究協力員
日本文化大学教授・二松学舎大学日本漢学研究中心研究協力員

川邊 雄大
川辺 雄大

2024年10月12・13両日、二松学舎大学(以下、本学)九段キャンパスにて日本中国学会第76回大会が開催された。

本学では、これまでに第14回大会(1962年)・第26回大会(1974年)・第56回大会(2004)が開催されており、20年ぶり4度目の大会開催校となった。

今大会では、哲学・思想、文学・語学、日本漢学、歴史の4部会に分かれて研究発表が行われたほか、特別シンポジウム「古典学の方法論」、書評シンポジウム(I哲学・思想、II文学・語学)、次世代シンポジウム(日本漢学)が行われた。また、大学資料展示室では、本学理事長・学長をつとめた故石川忠久教授の旧蔵書などを展示した、「岳堂文庫—石川忠久旧蔵漢籍—」展が、両日に互に行われた。

筆者は日本漢学部会で総司会・発表をつとめたが、日本漢学部会は、2010年に広島大学で開催された第62回大会で初めて設置され、その後はほぼ毎年発表が行われてきた。

今大会の日本漢学部会では、以下の発表および次世代シンポジウムが行われた。

12日午前

「義堂周信と偈頌の総集「貞和集」について」 太田亨(広島大)

『江湖集夾山鈔』所引の江西龍派「統翠抄」における「句面」と「句中」 武清陽(京都大院)

『四河入海』における林希逸『虞齋口義』の受容 瀧康秀(清泉女学院高)

伊藤仁斎『春秋』観の再考察—『春秋経伝通解』における中国『春秋』説の受容を手がかりに 于昊甬(東京大院)

12日午後 報告

清儒吳英の徂徠学受容—『論語』の「舜禹之有天下」章を中心に 蒋薰誼(東京大院PD)

「徂徠山人外集」とその漢籍版本について 堀尾裕真(名古屋大院)

13日午前

2024年10月12日至13日、日本中国学会第76届大会于二松学舎大学(以下简称“本校”)九段校区召开。

本校曾于1962年(第14届)、1974年(第26届)、2004年(第56届)三次承办该学会大会,此次为时隔20年第四次成为主办校。

本届大会分为哲学・思想、文学・语言学、日本汉学、历史四个分会场进行发表,另设特别研讨会“古典学方法论”、书评研讨会(I哲学・思想、II文学・语言学)及次世代研讨会(日本汉学)。大学资料展览室两日间同期举办“岳堂文庫—石川忠久旧蔵漢籍展”,展出曾任本校理事长兼校长的石川忠久教授旧蔵书籍。

笔者担任日本汉学分会场的主持人及发表人,现就该分会场情况略作评述。

日本汉学分会场自2010年广岛大学第62届大会首次设立以来,几乎每年均有研究成果发表。本届分会场议程如下:

12日上午

- ・太田亨(广岛大学):《关于义堂周信与偈頌的总集〈贞和集〉》
- ・武清阳(京都大学研究生院):《〈江湖集夹山鈔〉所引江西龙派〈统翠抄〉中的“句面”与“句中”》
- ・瀧康秀(清泉女学院高中):《〈四河入海〉对林希逸〈虞齋口義〉的接受》
- ・于昊甬(东京大学研究生院):《伊藤仁斎〈春秋〉观再考—以〈春秋経伝通解〉对中国〈春秋〉学说的接受为线索》

12日下午

- ・蒋薰誼(东京大学):《清儒吴英对徂徠学的接受—以〈论语〉“舜禹之有天下”章为中心》
- ・堀尾裕真(名古屋大学研究生院):《“徂徠山人外集”及其汉籍版本考》

13日上午

- ・汤青妹(九州大学研究生院):《山本北山の〈尚书〉学—以〈古文尚书勤王師〉为中心》

13日下午

- ・谢文君(北京大学中国古文献研究中心):《江戸时代苏轼史论的争议—汉文传播的两种机制考察》

山本北山の『尚書』学—『古文尚書勤王師』を中心に
湯 青妹（九州大院）

13 日午後 報告

江戸時代における蘇軾の史論の争い—漢文伝播の二つのメカニズムについての考察 謝 文君（北京大中国古文献研究中心）

日本近代の填詞作品にみえる「稼軒体」について 王書凝（関西大院）

・次世代シンポジウム「近代日本における漢学をめぐる諸問題」（司会）町 泉寿郎（二松学舎大）

漢学と明治知識人の「文学」「文学史」概念の受容について 杜 軼文（横浜市立大非）

川田甕江と歴史学—玉島図書館所蔵資料を中心に— 武田祐樹（二松学舎大非）

明治期における「漢文教授」をめぐる 佐川蘭子（國學院大）

忘れられた漢詩人千葉昌胤の文学的特質 辻井義輝（東洋大東洋学研究所）

戦前・戦中期の宮内省御用掛について—誄および墓誌の撰文を中心に— 川邊雄大（日本文化大）

以下、発表およびシンポジウムについて述べてみたい。

まず、発表では題目・発表者から分かれるとおり、中国人留学生を中心に、徂徠・北山など近世・近代を中心に、多岐にわたる発表が行われた。

全体的に、従来注目されていなかった分野について、新資料をもとに巻数・編数・題目などを詳細に列挙し、緻密に論じてはいるものの、必ずしも一定の傾向や特徴を導き出せているとはいいがたい発表が目立った。このほか、時代背景や全体像を把握せず、写本のみが存在する特定の資料について詳細に言及していたものの、あたかも当時その資料が広く通行していたかのような発表も目立った。当然のことながら、日本漢学を研究する以上、当時の日本の時代背景や当該人物に対する十分な理解と認識が必要であると感じた。

次に、次世代シンポジウムについて述べたい。

杜・武田発表では、「文学」「文学史」「史学」といった明治初期新たに導入された学術概念を、漢学者がいかに受容していったかについて、資料や著作をもとにその一端を明らかにした。杜は、中国文学史については従来、古城貞吉『支那文学史』（1897）を嚆矢とするのが一般的だったが、本発表ではこれに遡って末松謙澄『支那古文学略史』（1882）について論じた。武田は、明治初年から同 20 年代に至る、川田甕江による歴史関係の資料を紹介し、川田が西洋の歴史学に強い関心を抱いていたことを指摘した。さらに、重野成斎との対立を含め、川田と歴史学をめぐる議論につい

・王書凝（关西大学研究生院）：《日本近代填词作品中的“稼軒体”》

・次世代研讨会“近代日本汉学的诸问题”（主持人）町泉寿郎（二松学舎大学）

杜軼文（横浜市立大学非常勤講師）：《汉学与明治知识分子对“文学”“文学史”概念的接受》

武田祐树（二松学舎大学非常勤講師）：《川田甕江与历史学——以玉岛图书馆藏资料为中心》

佐川茧子（国学院大学）：《明治时期的“汉文教授”争议》

辻井义辉（东洋大学东洋学研究所）：《被遗忘的汉诗人千叶昌胤的文学特质》

川边雄大（日本文化大学）：《战前至战中期宫内省御用职能——以誄文与墓志撰述为中心》

发言和研讨会情况如下。

分会场发表以中国留学生为主力，聚焦近世至近代的获生徂徠、山本北山等人物，主题多元。

多数研究虽基于新史料对卷数、编目等细节详加考据，但整体缺乏对时代背景的宏观把握，部分论文甚至将孤本写本误作通行文献。笔者认为，日本汉学研究须以对当时社会背景及人物的充分理解为前提。

次世代研讨会中，杜軼文与武田祐树通过文献分析，揭示了明治汉学者如何接纳“文学”“文学史”“史学”等明治初期新导入的学术概念。关于中国文学史的书写，传统上多以古城贞吉《支那文学史》（1897）为嚆矢，但本次发表进一步上溯，对末松谦澄《支那古文学略史》（1882）的先行研究进行了探讨。武田通过梳理明治初年至 20 年代期间川田甕江的历史相关文献，指出川田对西方史学抱有浓厚兴趣。此外，研究进一步提出：需重新审视川田围绕历史学的诸种论争——包括其与重野成斋的学术对立。

佐川的发表围绕《汉文教授相关调查报告》（文部省《官报》第 8630 号汇编）所载汉学者们的争论展开论述。她指出：现今通行的汉文训读法实为明治末年才得以整理统一，因而不可简单视作传统方法的延续；另一方面，在台湾与朝鲜，汉文教学自初等教育阶段便采用当地语言直读而非训读法——这一差异表明，汉文训读本质上是以日本内地为对象的特殊教育范式，殖民地的汉文教育实践必须置于差异化政策背景下予以考量。

辻井义辉探讨了二松学舎出身的汉诗人千叶昌胤与朝鲜文人的交流。明治后，东京日本文人与清国公使馆员的汉诗唱和广为人知，但地方文人的跨国交流仍有大量未刊稿本待发掘。笔者近年研究东本愿寺上海别院的文化活动时，亦发现记录中日交流的汉诗集草稿，此类资料亟待系统整理。

辻井的发表聚焦于二松学舎出身的汉诗人千叶昌胤在朝鲜的活动及其与朝鲜文人的交流。他指出在近代以前，以汉诗文为媒介的中国、朝鲜等亚洲文人之间的交流范围极为有限，但明治时期后迅速扩大。其中，东京

て再考の必要性があることを論じた。

佐川発表では、「漢文教授ニ関スル調査報告」（文部省、『官報』第8630号彙報）をめぐる漢学者たちの議論などについて言及した。現在行われている漢文訓読法が整理・統一されたのは明治の末年であり、必ずしも伝統的なものとして捉えられない側面があると感じた。一方、台湾・朝鮮では、漢文の授業は初等教育から行われ、訓読を用いずに、現地語で直読をしていた。当然だが、漢文訓読は内地向け教育の議論であり、植民地では内地とは違った漢文教育が行われていたことに配慮する必要があるだろう。

辻井発表では、二松学舎出身の漢詩人千葉昌胤について、朝鮮での活動や朝鮮文人との交流について焦点を当てた。近代以前、漢詩文を介した中国・朝鮮をはじめとするアジア文人との交流は、当然ながらきわめて限定されていたが、明治以降急速に拡大する。東京における日本文人と清国公使館員との漢詩文の応酬は、その代表的な例であり、刊本もあることから広く知られている。一方、地方文人とアジア文人との交流は、近年の研究により明らかになってきている。筆者は、これまでに明治初期に東本願寺上海別院で行われた文化交流について研究を行っているが、その過程で日中交流を記録した漢詩集（草稿）を目にした。このように、地方の漢詩人による文化交流は、いまだ刊行されていない筆談録・漢詩集（稿本）が数多く残されているものの、発掘が充分になされていないことから、引き続き研究を進めていくことの重要性を感じた。

川邊発表は、西村時彦・吉田増蔵・加藤虎之亮ら宮内省御用掛をつとめた漢学者の資料等を用いて、これまで必ずしも充分に研究されたこなかった、彼らによる誄・御沙汰書・墓誌の撰文について、東郷平八郎・清浦奎吾・山本五十六・古賀峯一らを例として発表した。具体的には、その撰文過程・大臣等からの修正意見・撰文者の撰文に対する考え方・王政（帝政）に関する言説の一端を明らかにした。

今回のシンポジウムにおける発表は、いずれも近代になって漢学がいかに再構築されたかを示す好例である。今やこれら日本漢学に関するテーマの内容が日中学会で議論されることに違和感はないが、従来日中学会ではほとんど扱って来なかった分野であり、日中学会が発足した76年前当時どころか、20・30年前と比べても隔世の感がある。

最後に、今大会と照らし合わせて、本学における20年間の日本漢学研究について振り返ってみたい。

前回、本学で開催校となったのは20年前すなわち2004年であったが、本学で21世紀COEプログラム「日本漢文学の世界的拠点の構築」（2004～2008年度）が採択された年でもあった。翌2005年3月には『日本漢文学研究』が創刊され、その後は文部科学省私立

の日本文人と清国公使館員之间的漢詩文唱和作为典型案例，因有刊本存世而广为人知。相较之下，地方文人与亚洲文人的交流则是近年来才逐渐被学界所揭示。笔者在研究明治初期东本愿寺上海别院所开展的文化交流时，曾亲见记录中日交流的汉诗集（草稿）。由此可见，虽然地方汉诗人留下的未刊笔谈录、汉诗集（稿本）数量可观，但由于发掘整理工作尚不充分，相关研究仍具有重要推进价值。

川边的发表以曾任宫内省御用职的汉学者西村时彦、吉田増蔵、加藤虎之亮等人的未公开档案为基础，针对其撰写的誄文、御沙汰书（敕令文书）及墓志铭等未被充分研究的文本类型，以东乡平八郎、清浦奎吾、山本五十六、古賀峯一等重要历史人物为例展开分析。该研究具体揭示了以下四个维度的细节：文本撰述的具体流程；内阁大臣等提出的修改意见；撰文者自身的创作理念；文本中隐含的王权（帝制）相关论述。

本次研讨会中的各项发表，皆为展现近代汉学如何实现范式重构的典型案例。尽管这些日本汉学主题内容如今在中国学会的讨论中已无违和之感，但需特别指出的是：该领域不仅在中国学会创立之初的76年前完全缺席，即便与20、30年前的研究格局相比，亦呈现出显著的代际差异。

最后，请允许我以本届大会为参照，对本校二十年来日本汉学研究的发展轨迹作一学术性回顾。

上回2004年本校主办第56届大会时，恰逢本校21世纪COE计划“日本汉文学世界据点构建”（2004-2008年度）立项。2005年《日本汉文学研究》创刊，此后文部科学省私立大学战略研究基础形成支援项目（SRF）“近代日本‘知’的形成与汉学”（2015-2019年度）获得立项。以此为契机，研究机构的名称正式从“日本汉文学”变更为“日本汉学”，其核心研究范畴亦聚焦于近世至近现代时期的日本汉学研究。

在此期间，正如前文所述，本学会于第62届大会（2010年）正式设立日本汉学分会。自此，包括外国学者及留学生在内的日本汉学研究者队伍持续壮大，相关学术成果亦得到稳步积累。

与此同时，国际格局正经历深刻变革，中国的崛起不仅体现在政治经济领域，更已延伸至学术研究层面。本届大会中，不仅日本汉学领域，各分论坛中国学者的发表占比均超过半数，这一现象即为明证。然而，就日本汉学的全球化发展而言，我们仍期待未来能看到更多来自欧美及亚洲各国研究者的学术成果发表。

此外，随着国内外研究者群体的代际更替不断推进，日本汉学的研究体系正面临全面重构——这不仅涉及与中国学者的合作，更需构建与欧美及亚洲各国研究者的学术网络。尽管过去二十年间，本校在日本汉学研究领域的引领地位毋庸置疑，但未来二十年我们能够积淀怎样的学术遗产，已成为亟待解答的命题。毋庸置疑，本届大会标志着本校日本汉学研究迎来了一个关键性的转

大学戦略的研究基盤形成支援事業 (SRF)「近代日本の「知」の形成と漢学」(2015～2019年度)が採択された。これを契機として、名称を日本漢文学から日本漢学へと変更し、主な研究範囲も近世および近現代における日本漢学に絞られた。

この間、前述の通り本学会では62回大会(2010年)に日本漢学部会が設置され、その後は外国人研究者・外国人留学生を含めて日本漢学を研究する研究者は増加し、着実に研究成果を蓄積してきた。

一方、この20年で国際情勢は大きく変化し、とくに中国の擡頭は政治・経済のみならず、研究の分野にまで及んでいる。今回の大会で、日本漢学のみならず各部会においても中国人研究者の発表が半数以上を占めたことは何よりの証左であろう。しかしながら、日本漢学のグローバル化という意味では、今後は欧米やアジア各国の研究者による発表や投稿もほしいところである。

また、内外の研究者の世代交代が進み、中国のみならず欧米やアジア各国の研究者との人脈構築を含め、日本漢学の研究体制は再構築を迫られている。過去20年、本学会は日本漢学研究をリードして来たことは疑うべくもないが、今後20年で何を蓄積していけるかが問われている。本大会は本学会の日本漢学研究にとって一つの節目になった事は間違いない。

筆者にとっても、近年コロナ禍による大会の中止やオンライン開催のため、久しぶりの大会だけでなく懇親会への参加となった。学会への参加、研究者間の近況報告・情報交換を行うことの大切さを改めて認識するとともに、参加者もずいぶんと世代交代が進んだ印象を受けた。

日本中国学会第77回大会は2025年に九州大学で、第78回大会は2026年に北海道大学での開催が予定されている。本学会(日本中国学会)の更なる発展を期待したい。

以上

折点。

対筆者而言、此次大会因疫情停办及线上举办的常态化而显得尤为珍贵——不仅是睽违已久的线下学术聚会，更难得恢复了学者联谊活动。通过实际参与，笔者深切体会到：学术会议作为研究者交流近况、共享信息平台的核心价值始终未变；而更令人感慨的是，与会者群体已呈现出显著的代际更替特征。

日本中国学会第77届(2025年)与第78届(2026年)大会将分别由九州大学与北海道大学主办。谨祝本学会(日本中国学会)蓬勃发展。

以上

西三島家（三島中洲生家）の家伝資料の寄贈 西三島家（三島中洲生家）捐贈家伝資料

東アジア学術総合研究所長・日本漢学研究センター長・二松学舎大学文学部教授
东亚学术综合研究所所长・日本汉学研究中心主任・二松学舎大学文学部教授

町 泉寿郎
町 泉寿郎

2025年2月に、宝塚在住の三島信氏から家伝資料の寄贈の申し出があった。同氏は、本学の学祖三島中洲の生家である備中窪屋郡中島村の庄屋をつとめた西三島家のご子孫に当たられる。

西三島家は、中洲らの父寿太郎正昱（西三島家5代）が早世した後、中洲の兄舒太郎縄正（西三島家6代）が家督を継ぎ、その長男定太郎時正が庄屋見習いと倉敷代官所の手代を務めていた。だが、慶應2年（1866）4月に奇兵隊の別動隊が倉敷・浅尾を襲撃した際に、倉敷代官所の手代として役所を守っていた定太郎時正は戦死してしまう。

そこで、西三島家では親類の松三島家から中洲の門人でもある竹太郎正統を養子に迎えた（西三島家7代）。竹太郎に子がなかったため、そのあと更に竹太郎の弟虎次郎兼愛（松三島家2代）の長女藤と実（堀氏、西三島家8代）をめあわせて家督を継承し中島村の旧宅を守った。

実の長男甫（1909～2005、西三島家9代）は中島村を出て宝塚に住み、その弟淳三郎も芦屋に住んだ。現在は、淳三郎の長男信氏が甫の養子となって宝塚の三島家を継いでいる（西三島家10代）。小職は、かつて1995年11月頃に大谷光男名誉教授に同道して三島甫氏を宝塚の三島邸に訪問したことがある。

このたび本学で受け入れた西三島家の家伝資料は全体で約400点にのぼる。西三島家歴代（中洲の祖父正武、兄舒太郎縄正やその長男定太郎時正）のものもあるが、中洲から本家筋にあたる兄の家に贈られた資料も多く含まれており、皇室からの下賜品で三島中洲の箱書きがある資料もあり、極めて貴重かつ良質な資料である。日本漢学研究センターで資料整理と研究を進め、順次成果を公開していきたい。

資料の概要は以下の通りである。

- I 書画類
- ① 表装済のもの 65点
 - ② 未表装のもの 129点
 - ③ 扇面 14点
 - ④ 短冊 39点
 - ⑤ 書画卷・書画帖 5点

2025年2月、居住在宝塚の三島信先生表示希望捐贈家中保存的资料。他是本校学祖三岛中洲的后代，出身于担任过备中窪屋郡中岛村庄屋的西三岛家。

中洲之父寿太郎正昱（西三岛家第5代）早逝后，由其兄舒太郎绳正（第6代）继承家督。舒太郎之子定太郎时正曾任庄屋见习，后出任仓敷代官所手代。庆应二年（1866）四月，奇兵队别动队袭击仓敷与浅尾，定太郎作为代官所手代负责守卫官署，不幸战死。

为此，西三岛家从亲戚松三岛家迎立亦为中洲门人的竹太郎正统为养子（西三岛家第7代）。因竹太郎无子嗣，后续又安排竹太郎之弟虎次郎兼爱（松三岛家第2代）长女藤与实（堀氏，西三岛家第8代）继承家业，守护中岛村旧宅。

实的长子甫（1909-2005，西三岛家第9代）迁居宝塚，离开了中岛村；其弟淳三郎则定居于芦屋。如今由淳三郎的长子信氏作为甫的养子，继承宝塚的三岛家，成为西三岛家第10代。1995年11月，笔者曾随大谷光男名誉教授一同拜访位于宝塚的三岛宅邸，拜会甫先生。

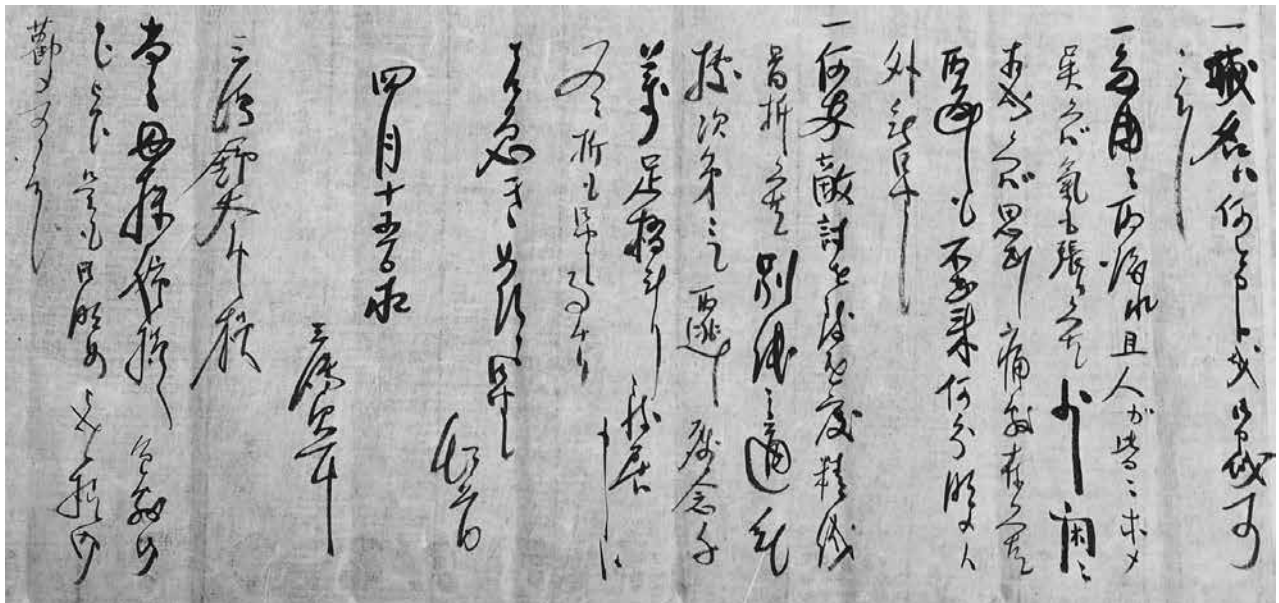
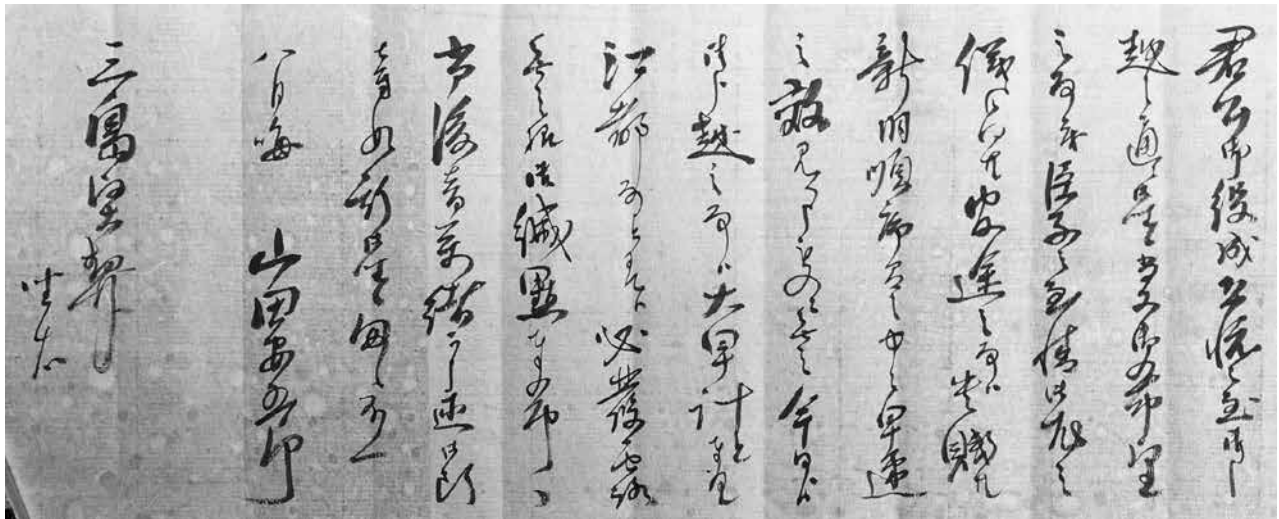
此次本校共获赠西三岛家传资料约400件。除中洲祖父正武、兄舒太郎绳正及其子定太郎时正等历代家属的遗物外，亦包含大量中洲赠予兄长一家的资料。其中不乏皇室赐品，且由三岛中洲亲题匣面，堪称珍贵罕见的史料。相关资料将由日本汉学研究中心负责整理与研究，并将逐步对外公开成果。

资料概要如下：

- I 書画類
- ① 装裱作品：65件
 - ② 未装裱作品：129件
 - ③ 扇面：14件
 - ④ 短冊：39件
 - ⑤ 書画卷与書画帖：5件
- II 文書類

II 文書類 ① 書簡 61 点
② 文書 38 点
③ 写真 5 点
④ 書籍 10 点
III 器物 9 点

① 书信：61 件
② 文书资料：38 件
③ 照片：5 件
④ 书籍：10 件
III 器物类 共 9 件



高校生による探究活動の事後報告 記一次高中生研究性学习的调研活动

二松学舎大学東アジア学術総合研究所 日本漢学研究センター 助手
二松学舎大学东亚学术综合研究所 日本汉学研究中心 助手

大江 公太
大江 公太

2024年8月7日、二松学舎大学東アジア学術総合研究所日本漢学研究センターにおいて、所長兼センター長の町泉寿郎教授（二松学舎大）協力のもと、大阪府の関西創価高等学校に所属する2年生（当時）の増田陽子さんより取材を受けた。本取材の開催経緯は下記のとおりである。

本取材は、関西創価高等学校で取り組まれている“SDGsを中心とした探究活動”の一環として、増田さんが立てた「なぜ返り点が付いた漢文が今も残っており、漢文訓読としてそれを学ばなければならないのか」というリサーチクエスチョンに対し、当センターが取り組んでいる事業が、探究活動の内容と関連性が高く、助言をいただきたいと相談を受け、町教授と打ち合わせの上、企画されたものである。

以下、取材の様様について記す。

当日は、オンライン会議ツール（ZOOM）を使用して、町教授が増田さんから受けた質問に対して解説をする形で行われた。

まず「日本だけ訓読という方法で漢文を読んでいるが、それにはどういう意図があるのか」という疑問に対し、町教授は次のように答えた。

前近代の日本人が書いた文章の大半が漢文体、若しくは漢字表記で書かれていることから、それらに対する読解能力を培うことが欠かせない。また、漢文訓読は日本特有の読解方法というわけではなく、朝鮮には“懸吐”や“吏読”と呼ばれる、古典中国語を自国語で読む方法や漢字で自国語を表記する方法があり、ベトナムでもハンノムやチュノムと言われる漢字に由来する国語表記があった。日本へは恐らく朝鮮半島経由で伝わったのではないかと考えられる。

次に「孔子の思想を学ぶためであれば、漢文でなくてもよいのではないか」という疑問に対し、

宗教的・思想的なテーマや内容については国語科ではなく、社会科の倫理社会の授業で学ぶのである。そこでは漢文を用いるわけではないから、孔

2024年8月7日、二松学舎大学东亚学术综合研究所日本汉学研究中心所长兼中心主任町泉寿郎教授（二松学舎大学）接受了大阪府关西创价高中二年级学生增田阳子的专访。采访背景如下：

该采访系关西创价高中“以SDGs为核心的研究性学习”项目组成部分。增田同学提出研究课题：“为何标注返点的汉文至今仍被保留，且必须作为训读内容学习？”鉴于本中心开展的研究事业与其探究内容高度相关，经增田同学提出咨询请求，并与町教授充分协商后，特此策划实施。

本次采访源于关西创价高中开展的“以SDGs为核心的探究活动”。该校增田同学提出了“为何标注返点的汉文至今留存，且须作为训读内容学习？”的研究问题，因同本中心研究项目高度相关，经与町泉寿郎教授协商后，特安排此次学术访谈。

以下就采访的具体情况进行记述。

当日通过在线会议工具（ZOOM）进行，町教授以问答形式对增田同学提出的问题作出了专业解答。

针对首项疑问“为何唯独日本采用训读法解读汉文，其背后有何特殊考量？”，町教授作出如下回应：

町教授指出：“由于前近代日本人所撰写的文章大多采用汉文体或汉字表记，培养对这些文献的解读能力实属必要。同时需要说明的是，汉文训读并非日本独有的解读方法——朝鲜半岛存在称为‘悬吐’和‘吏读’的古典汉语本土化阅读及汉字表记法，越南亦存在源自汉字的‘喃字’（Hán Nôm）和‘喃字’（Chữ Nôm）国语表记系统。据现有研究推测，训读法很可能是通过朝鲜半岛传入日本的。”

针对“若仅为学习孔子思想，是否不必通过汉文？”的疑问，町教授作出如下学理辨析：

“涉及宗教、思想类主题的内容，在日本教育体系中属于社会科‘伦理社会’课程范畴而非国语科教学内容。该课程本就不采用汉文教材，故若仅以理解孔子思想要旨为目的，确实无需修习汉文训读。然而，若研究者追求基于原始文本的思想研读，则汉文训读作为根本解读方法的存在价值自然得以确立。”

子の思想自体を学ぶのであれば、漢文訓読を学ぶ必要性は無いと考える。だが、原文に基づいて思想を学びたいという考えもあって当然だから、その読解方法として漢文訓読が存在する。

と答えた。

そして、今回の探究活動における最大の論点である「なぜ返り点が付いた漢文が今も残っており、漢文訓読としてそれを学ばなければならないのか」ということに対し、町教授は次のように述べた。

日本人にとって漢文訓読を学ぶ第一の理由は、過去の日本人が書いた詩文を読むためだ。先ほども言ったが、忘れてはいけないのが、前近代の日本人が書いた文章の相当数が漢文体、もしくは漢字表記で書かれていることだ。過去の日本を知るためには、漢文や崩し字の読解スキルがやはり欠かせない。

筆者は、学部4年生の時に受けた教育実習にて、古典探究の授業を受け持った際に「矛盾」や「画竜点睛」漢文を教材として用いたのだが、「どうして漢文を学ぶのか」と疑問を抱く生徒が少なからずいたことを記憶している。筆者が高校生として学んでいた時とは違い、漢文を学ぶことに距離感を覚える生徒の数が年々増加していることを、実際に教育の現場に立って初めて実感したのだ。

しかし、授業回数を重ねていく内に、筆者が担当したクラスの生徒達は漢文に対する不満によって疑問を抱いていたのではなく、彼らが秘めている知的好奇心がそういった疑問を生じさせていたのだと分かった。教育実習が終わって部活動を見学していたある日、授業を受け持っていた生徒である後輩が筆者のもとへやって来て「テスト、クラスで1位とれました!」「面白かった!」と声をかけてくれたことがあった。漢文の学修に対する不満を抱いていたら、このようなうれしい報告は無かっただろう。

今回、現役の高校生と大学教授との受け答えを間近にし、増田さんのように漢文教育を題材にした探究活動に正面から取り組もうとする姿勢に対して、筆者は深い感銘を受けた。

教育の現場において“漢文”というものが徐々に衰退していき、中学生や高校生たちが漢文と触れ合う術が限られてしまいつつある昨今、我々のように、漢文と深いかわりを持つ者としては、学生や社会人などといった垣根を越えて、何かしらのきっかけを通して漢文への興味や、学びの意欲へと繋がってくれる人物が一人でも多く現れることを、切に願う次第である。

以上
(2025年3月)

针对本次探究活动的核心议题——“为何标注返点的汉文至今仍被保留，且必须作为训读内容学习？”，町教授从学术传承的角度作出本质性解答：

“对日本人而言，学习汉文训读的首要意义在于解读先人创作的汉诗文。正如前文所述，必须明确认识到：前近代日本文献中汉文体或汉字表记文本占据极大比重。若要真正理解历史日本，汉文及变体汉字的解读能力实为不可或缺之学术基础。”

笔者仍清晰记得，在本科四年级教育实习期间执教古典探究课程时，虽选用《矛盾》《画龙点睛》等耳熟能详的汉文篇章作为教材，但提出“为何要学习汉文”之问的学生仍不在少数。相较于笔者高中时代的学习体验，在实际教学过程中深切感受到：对汉文学习产生疏离感的学生比例正逐年攀升，这一现象令人深思。

但随着教学次数的增加，笔者发现：班级学生提出质疑并非源于对汉文的不满，实则是其内在求知欲的自然体现。教育实习结束后某日，在观摩社团活动时，曾听课的后辈学生特意前来告知：“汉文测试取得了班级第一!”“汉文课很有趣!”——若真有学习抵触情绪，决不可能产生如此积极反馈。

此次近距离观察一名高中生与大学教授的学术对话，増田同学以汉文教育为课题开展探究的治学态度令笔者深感钦佩。在当前汉文教学日渐式微、中学生接触汉文机会日渐减少的教育环境下，作为与汉文关系密切的学人，我们殷切期盼：能有更多跨越学生与社会人士界限的引路人出现，通过各种方法激发新一代对汉文的研究热忱。

以上
(2025年3月)

『続資治通鑑綱目講説』等資料調査・杉山令吉『三郊日記』等 資料調査報告

《续资治通鉴纲目讲说》等资料调查、杉山令吉《三郊日记》等资料调查报告

日本漢学研究センター研究協力員・二松学舎大学文学部非常勤講師
日本漢学研究中心研究協作者、二松学舎大学文学部非常勤講師

武田 祐樹
武田 祐樹

・『続資治通鑑綱目講説』等資料調査

令和6年11月4日から同月5日の2日間の日程で、岡山県高梁市内にある山田方谷記念館にて資料調査を行った。山田方谷関連資料については、長澤孝三・児玉享編『高梁市図書館所蔵古書分類目録』（山田方谷生誕二百年記念事業実行委員会、2004年）があるものの、その後に資料の帰属先が変化し、現地の状況が分からなくなっていた。他方、山田方谷（1805～1877）の藩政改革について論じる際に祖上にのぼせられる『続資治通鑑綱目講説』についても、その所蔵先や書誌の形態などが不明瞭であった。今回の調査では、上述の問題解決のため、現在の複合施設化した高梁市図書館と事前のやり取りを行い、現地では市役所の社会教育課、および山田方谷記念館に在職している山田方谷の子孫山田敦氏から資料の管理状況についての聞き取りを行い、かつデジタルカメラによる資料の写真撮影を行った。なお、資料の撮影には、別件で岡山滞在中の町泉寿郎教授も同行し、ご協力いただいた。

また、『続資治通鑑綱目講説』を実見した結果、今回の調査対象である山田家所蔵写本は『山田方谷全集』所収のものとは、形態上の異同が認められた。

・杉山令吉『三郊日記』等資料調査

令和7年3月11日から同月13日の3日間の日程で、岐阜県安八郡の神戸町中央公民館にて、資料調査を行った。調査対象の『三郊日記』は、漢学者川田瓮江（1830～1896）の娘婿である、杉山三郊（1855～1945）の日記である。そのため調査実施にあたっては、当該資料が瓮江研究にも資するものと期待された。実際、全89点の所蔵資料の内、大半は軸装の書画ではあるが、写真や三郊手録『済寧館講義筆記』（瓮江による『春秋左氏伝』の講義か）も含む、貴重なコレクションであると判明した。特に、『三郊日記』は質といい量といい今後の日本漢学研究に確実に役立つ資料であり、こういった日記類によくある簡素な記述が羅

《续资治通鉴纲目讲说》等资料调查

令和6年11月4日至5日，前往冈山县高梁市山田方谷纪念馆，开展为期两天的资料调查。关于山田方谷相关史料，虽有长泽孝三与儿玉享编著的《高梁市图书馆所蔵古书分类目录》（山田方谷诞辰二百年纪念事业执行委员会，2004年），但因资料后续的移交与馆藏变动，现存状况一度不明。而在探讨山田方谷（1805～1877）藩政改革的相关研究中，经常被引用的《续资治通鉴纲目讲说》，其藏书位置与版本形态也存在诸多不确定之处。

本次调查旨在厘清上述问题，事前与现已整合为复合设施的高梁市图书馆进行沟通协调，实地走访市政府社会教育课与山田方谷纪念馆，并采访了山田方谷后裔、现任纪念馆职员山田敦先生，了解相关资料的管理现状，并进行了数字影像拍摄。期间，町泉寿郎教授亦因公务滞留冈山，协同参与了部分拍摄工作。

此外，经实地检视《续资治通鉴纲目讲说》后确认，此次调查所见山田家所蔵写本与《山田方谷全集》所收版本在形态特征上确有差异。

杉山令吉《三郊日记》等资料调查

令和7年3月11日至13日，在岐阜县安八郡神戸町中央公民馆进行了为期三天的调查。此次研究对象为汉学家川田瓮江（1830-1896）之婿杉山三郊（1855-1945）的日记《三郊日记》。因此，本次调查也有望为川田瓮江的研究提供新的史料支持。

鉴于此，本次调查特别关注该批资料对川田瓮江研究的补充价值。经核查，在全部89件馆藏中，虽然大多数为卷轴书画，但也发现了历史照片以及杉山三郊手稿《济宁馆讲义笔记》（疑为瓮江讲授《春秋左氏传》的讲义记录）等珍贵文献。

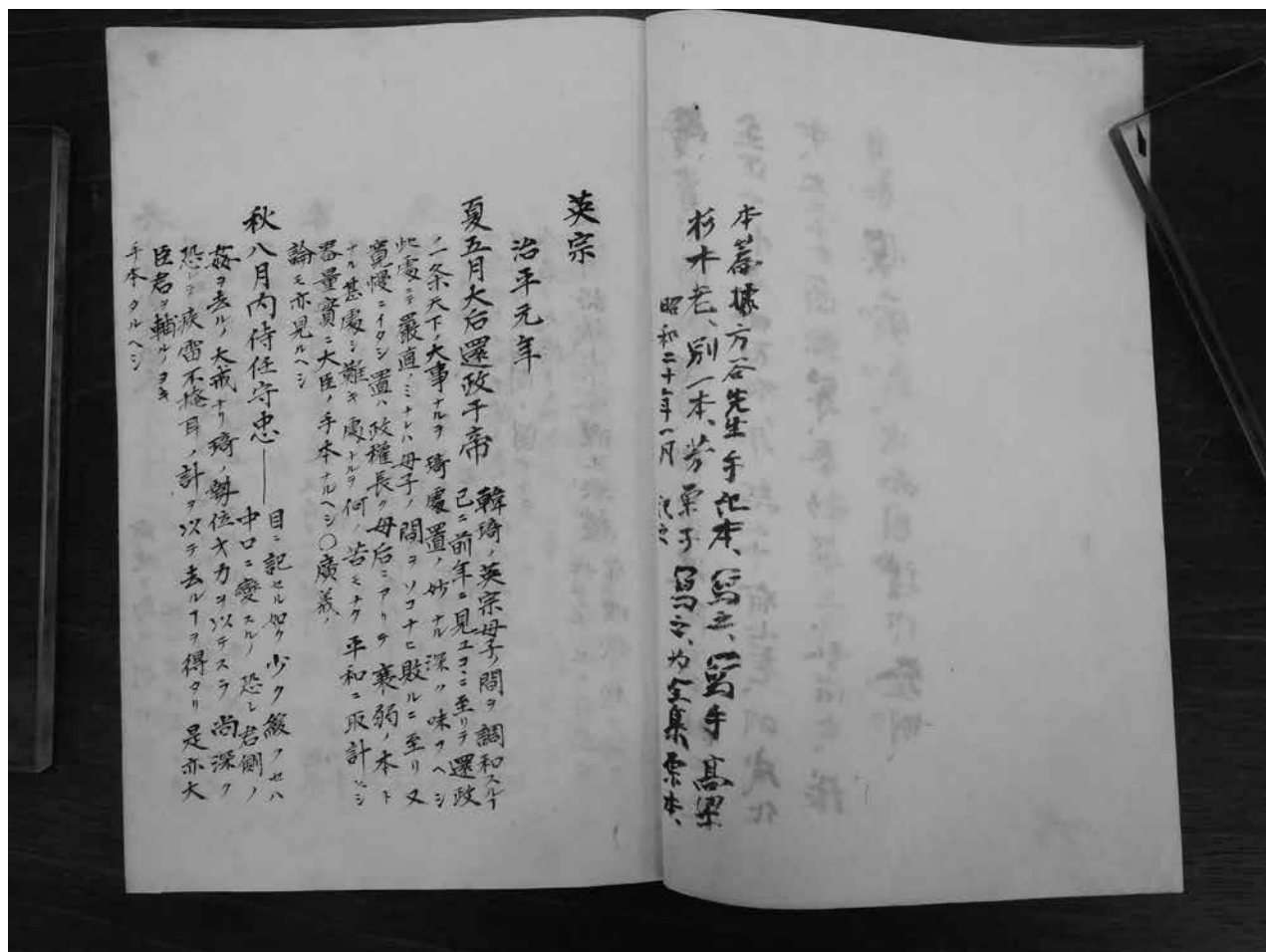
尤其值得关注的是，《三郊日记》无论在质与量上，都是日本汉学研究的重要素材，其内容并非一般日记的简略记述。在时间允许范围内，我们已完成对18册日记（涵盖明治9、10、12至19、22、23、25至28年，

列されたものではないと分かった。よって、時間の許す限り資料の写真撮影を行い、18冊（明治9年、10年、12年～19年、22年、23年、25年～28年の日記および27年『教場日誌』と『航西費用明細簿』）+アルファ（葉書など）について作業を終えた。これは『三郊日記』全体の3分の1ないしは4分の1ほどである。今後は資料の解説を行う一方、『三郊日記』全体の撮影機会を待ちたい。

なお、『三郊日記』には、本学創始者三島中洲（1831～1919）とその周辺人物の名も頻繁に見え、二松学舎にとっても重要な資料であると分かってきたことを付け加えておく。

以及27年の《教場日誌》《航西費用明細簿》）及相关散页（如明信片等）的数字拍摄。这部分约占《三郊日记》全集的三分之一至四分之一。后续将在推进文本解读的同时，等待机会完成全套《三郊日记》的拍摄。

需特别说明的是，《三郊日记》中频繁出现本校创始人三岛中洲（1831-1919）及其交际圈人物的记录。经考证，该文献对二松学舎校史研究具有重要价值。



寄贈資料一覧 (受入：令和6年4月～令和6年8月)

■目録

書 名	発行所（発行年）
太祖瑩山七〇〇回大遠忌記念 松山寺所蔵『傳光録』影印	鶴見大学仏教文化研究所（2024.3）
禪の心と形 ―總持寺の至宝―	曹洞宗大本山總持寺企画展（2016.4）
相承 ―大いなる足音を未来へ―	大本山總持寺大遠忌局、鶴見大学仏教文化研究所（2024.4）
明德出版社図書目録	明德出版社（2024）
同成社図書目録	同成社（2024）
福地書房 和本・書画目録	福地書房（2024）
郷土資料目録 家分文書（早野家文書） 第43集	大垣市立図書館（2024.3）
大垣市史 資料集 『藤渠漫筆』十 第三十七編～第四十編	大垣市立図書館（2024.3）
『大垣市史 通史編 近現代』 収集写真目録（5） 商工会議所所蔵分	大垣市立図書館（2024.3）
高知に関する研究・文献目録（歴史・考古・民族） ―令和三・四年度―	高知県立高知城歴史博物館（2024.6）
自由民権運動期 高知県の結社等一覧	高知県立高知城歴史博物館（2024.3）

■紀要

書 名	発行所（発行年）
石橋湛山研究 第6号	立正大学石橋湛山研究センター（2024.3）
学芸 国語国文学 第56号	東京学芸大学国語国文学会（2024.3）
人文科学年報 第54号	専修大学人文学研究所（2024.3）
専修大学人文学研究所月報 第323号	専修大学人文学研究所（2023.5）
専修大学人文学研究所月報 第324号	専修大学人文学研究所（2023.7）
専修大学人文学研究所月報 第325号	専修大学人文学研究所（2023.9）
専修大学人文学研究所月報 第326号	専修大学人文学研究所（2023.11）
専修大学人文学研究所月報 第327号	専修大学人文学研究所（2024.2）
国際日本学論叢 第21号	法政大学大学院 国際日本学インスティテュート（2024.3）
鶴見大学仏教文化研究所紀要 第28号	鶴見大学仏教文化研究所（2023.3）
鶴見大学仏教文化研究所紀要 第29号	鶴見大学仏教文化研究所（2024.3）
安井息軒《救急或問》訳考	宮崎市安井息軒記念館（2024.3）
漢學研究 第116号	漢學研究中心（中華民国）（2024.3）
大東文化大學會誌 第63号	大東文化大學漢學會（2024.3）
東洋文化研究 第26号	学習院大学東洋文化研究所（2024.3）
調査研究報告 戦時期における植民地住民子女び 学校教育体験 第73号	学習院大学東洋文化研究所（2023.9）
調査研究報告 戦時期の大連・心境における中学校生徒の 生活と時代認識 聞き取り調査から 第74号	学習院大学東洋文化研究所（2023.9）

調査研究報告 日本語における漢語語基史ち新漢語史のための 基礎的調査研究 ―漢字・漢語の“気づかない近代変化”― 第 75 号	学習院大学東洋文化研究所 (2024.3)
調査研究報告 School Culture and Heatstroke in Secondary and Higher Education in Japan and Malaysia 第 76 号	学習院大学東洋文化研究所 (2024.3)
漢学研究通説 第 170 号	漢学研究センター (中華民国) (2024.5)
漢学研究 第 117 号	漢学研究センター (中華民国) (2024.6)
高知県立高知城歴史博物館 研究紀要 第 6 号	高知県立高知城歴史博物館 (2024.3)
人文科学研究所年報 第 45 号	中央大学人文科学研究所 (2024.8)
泊園 第 63 号	泊園記念会 (2024.7)
中國思想研究史 第 45 号	京都大學中國哲學史研究會 (2024.3)

■お知らせ・レター・会報

書 名	発行所 (発行年)
KU-ORCAS NEWS LETTER No.7	関西大学アジア・オープン・リサーチセンター (2024.3)
非文字資料研究センター News Letter No.51	神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター (2024.3)
関西大学文化交渉学 ニュースレター No.9	関西大学文化交渉学研究拠点 (2023.9)
ふみ 特別号	国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター (2024.3)
国文研が描く 10 年後の未来図	国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター
国文学研究資料館概要 2024	国文学研究資料館 (2024)
東方学会報 No.126	東方学会 (2024.7)

■一般図書

書 名	発行所 (発行年)
岡田武彦全集 楠本端山 第 25 巻	明德出版社 (2024.1)

寄贈資料一覧 (受入：令和6年9月～令和7年3月)

■目録

書 名	発行所（発行年）
松野文庫の贈り物	国文学研究資料館（2024.9）
枕草子と春曙文庫―田中重太郎旧蔵資料を中心に―	国文学研究資料館・相愛大学（2024.10）
賀茂季鷹と古典の「知」	国文学研究資料館・京都産業大学（2024.10）
岡山の至宝―正宗文庫の輝き―	国文学研究資料館・就実大学人文科学部（2024.9）

■紀要

書 名	発行所（発行年）
漢學研究通訊 第171号	漢學研究中心（中華民国）（2024.8）
人文研紀要 第107号	中央大学人文科学研究所（2024.9）
人文研紀要 第108号	中央大学人文科学研究所（2024.9）
人文研紀要 第109号	中央大学人文科学研究所（2024.9）
漢學研究 第118号	漢學研究中心（中華民国）（2024.9）
天理参考館報 第37号	天理大学附属天理参考館（2024.10）
漢學研究通訊 第172号	漢學研究中心（中華民国）（2024.11）
文化交渉 東アジア文化研究科院生論集 第14巻	関西大学大学院東アジア文化研究科（2024.11）
漢學研究 第119号	漢學研究中心（中華民国）（2024.12）
アジア文化史研究 第24号	東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻（2024.12）
東洋学研究 第62号	東洋大学東洋学研究所（2025.3）
漢學研究通訊 第173号	漢學研究中心（中華民国）（2025.3）
国際日本学論叢 第22号	法政大学大学院 国際日本学インスティテュート（2025.3）

■お知らせ・レター・会報

書 名	発行所（発行年）
北九州市立大学地域戦略研究所 NewsLetter No.26	北九州市立大学地域戦略研究所（2024.8）
関西大学文化交渉学 ニュースレター No.10	関西大学文化交渉学研究拠点（2024.9）
多度津文化財保存会報 第26号	多度津文化財保存会（2024.10）
慶應義塾大学東アジア研究所 ニュースレター No.38	慶應義塾大学東アジア研究所（2024.12）
東方學會報 No.127	東方学会（2024.12）
北九州市立大学地域戦略研究所 NewsLetter No.27	北九州市立大学地域戦略研究所（2025.1）

■一般図書

書 名	発行所（発行年）
小島康敬 校注『乳井貢 志学幼弁』	北海道大学出版会（2024.12）

2024年度 二松学舎大学 日本漢学研究センター主催公開講座

2024年度日本漢学研究センターが主催する公開講座は、日本漢学研究又は漢文文献の調査・整理に関心を持つ若手研究者を育成する講座です。受講対象者は、学内外の大学院生及び院生レベルの若者を主とし、他に一般社会人等にも、演習・講義等を通じて必要な基礎知識と技能を身につけていただくことを目的としています。

◆受講料：無料 ◆対象者：学生、研究者、教員、図書館員及び一般の方 ◆会場：本学九段校舎

講座名			内 容	講 師	所 属	曜日・時限	受講者数
演習講座	1	古文書 解読講座	江戸～明治期の儒者・医者など、漢文に素養のある人々の書簡・日記・書幅などの肉筆資料を中心に読解していく。一般に漢籍と異なり国書では書写資料の占める割合が高く、ことに江戸～明治期の漢詩漢文は同好者間に小部数流通した 경우가多く、この分野を扱う以上、書写資料の読解は避けて通れない。多くの資料に触れて、当時の書体・用字・用語に習熟して欲しい。	町 泉寿郎	本学文学部 教授	火曜日 6時限	4
	2	序文 解読講座	明治時代に行われた文化交流の形式の一つとして、ユニークな役割を果たした序跋が挙げられる。それは、筆談資料と共に注目的となっている。本講義は、清国人が明治時代の日本人の著作のために寄せた序文・跋文（漢文）を広く集めて一緒に読解していく。序文の内容と書写の特徴に習熟すると同時に、文献整理や読解の力を高め、明治時代における日中交流の実態に迫りたい。	王 宝平	本学文学部 教授	水曜日 3時限	3
	3	『天道潮原』 解説	日本や中国の近代化は、好むと好まざるとに拘わらず、西欧化という道をたどらざるを得なかったが、輸入しようとする西欧近代文明には日本や中国が禁教としてきたキリスト教が必ず付随していた。これを排除するのか、あるいは受容するのか。逆に言えば、宣教師たちはどのようにアジアにキリスト教を再度もたらそうとしたのだろうか。新島襄や山本覚馬も読んだという『天道潮原』を解説しながら、アジア近代化とキリスト教再渡来の影響を考えてみたい。	中村 聡	本学文学研究科 非常勤講師	木曜日 3時限	0

《各講座》 前期： 4/10～7/30 後期： 9/12～1/20

三島中洲研究会（2024 年度開催分）

回	開催日	演者・演題
第 150 回	2024.4.13	町泉寿郎：渋沢栄一と安川敬一郎 菊地誠一：高草木重敬の人物と詩文について
第 151 回	2024.6.8	川邊雄大：戦後期の二松学舎—大学昇格及び大学院設置を中心として—
第 152 回	2024.7.6	町泉寿郎：山田方谷『英将秘訣』再論
第 153 回	2024.9.21	辻井義輝：詩中の虎—千葉昌胤の生涯と文学—
第 154 回	2024.11.2	胡加貝：収集家廉泉と二松学舎関係者の交流について—『南湖東遊日記』を手掛かりに—
第 155 回	2024.1.25	町泉寿郎：三島中洲の法律関係資料
第 156 回	2024.3.22	町泉寿郎：三島中洲と実業家たち その 1

山田方谷研究会（2024 年度開催分）

回	開催日	内容
第 62 回	2024.4.13	『山田方谷全集』会読
第 63 回	2024.6.8	『山田方谷全集』会読
第 64 回	2024.7.6	『山田方谷全集』会読
第 65 回	2024.9.21	『山田方谷全集』会読
第 66 回	2024.11.2	『山田方谷全集』会読
第 67 回	2024.1.25	『山田方谷全集』会読
第 68 回	2024.3.22	『山田方谷全集』会読

諸会議等報告 (2024 年 4 月～2025 年 3 月)

●日本漢学研究センター運営連絡会

回	開催日	主な議題（協議事項・報告事項等）①	主な議題（協議事項・報告事項等）②
第 1 回	2024.4.17	構成員について	事業概要について
第 2 回	2024.8.2	資料の購入について（井上哲次郎関連書簡）	
第 3 回	2024.9.18	2025（令和）7 年度特別事業予算申請について	研究会の開催について
第 4 回	2024.10.25	資料調査の実施について	
第 5 回	2024.11.27	『日本漢学研究』投稿者の追加について	
第 6 回	2025.3.3	助手の選考について	
第 7 回	2025.3.5	資料調査の実施について	漢籍資料の購入について

●研究会

開催日	名称	テーマ	会場
2024.12.7	日本漢学研究センター研究会	ヨーロッパの政治思想と自由民権運動の時期の日本、漢学	二松学舎大学 3 号館 3051 教室

●研究協力

大学・機関名	プロジェクト名
山東大学	「全球漢籍合璧工程」
国文学研究資料館	データ駆動による課題解決型人文学の創成におけるデータベース構築

●刊行物

書誌名	責任編集者	発行年月日
『転換期における東アジア文化交流と漢学』	王宝平・町泉寿郎	2024.10.3
『日本漢文学研究』第 20 号	日本漢文学研究編集委員会	2025.3.31
「雙松通訊」Vol.31	日本漢学研究センター	2025.3.31

Editor's note

編集後記

●『雙松通訊』31号の発行が遅れて、2024年度の日本漢学研究センターの活動報告が8月にずれ込んだことをお詫びいたします。「雙松通訊」の名付け親である佐藤保先生(本学顧問・元理事長)が3月31日に91歳で逝去されました。また今回から従来の和文・英文の併記を和文・中文併記に改めました。ニューズレターの英文併記は、理事長として21世紀COEプログラムの推進に指導力を発揮された佐藤先生のご意見によるものでしたから、泉下の佐藤先生にはお叱りを受けるかもしれませんが、数年来、熟議を重ねた結果です。各位のご理解を得たく存じます。本号に記した活動報告のほか、昨年12月7日にはシンポジウム「ヨーロッパの政治思想と自由民権運動時期の日本、漢学」を開催し、その成果は本年度末に『日本漢学研究叢刊』第5巻として刊行する予定です。昨年11月には、広州・暨南大学の一行(中華文化港澳台及海外伝承伝播協同创新中心・程国賦主任ほか)の各位が本学を訪問され、その後、日本漢学に関する共同研究を行うべく協定書を締結いたしました。引き続き弊センターの活動にご理解とご鞭撻を賜るようお願い申し上げます。(S.M.)



『二松學舎』
中洲先生印譜

雙松通訊 Vol.31

発行日 ——— 2025年3月31日

編集・発行 ——— 二松学舎大学東アジア学術総合研究所
日本漢学研究センター実施委員会

〒102-0074 東京都千代田区九段南2-4-14
TEL. 03-3261-3535 FAX. 03-3261-3536
e-mail: kangaku@nishogakusha-u.ac.jp

<https://www.nishogakusha-u.ac.jp/eastasia/>